

聖書：マタイ 5：27～32

説教題：姦淫してはならない

日時：2018年3月18日（朝拝）

イエス様は 20 節で「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」と言われました。律法学者やパリサイ人とは、当時のユダヤにおいてイスラエルの宗教に熱心な人々と尊敬されていた人々です。その彼らの義にまさらなければならないとは一体どういうことでしょうか。イエス様はそのことを具体的な戒めを取り上げて解説しています。前回は十戒の第 6 番目の戒め、「殺してはならない」について語られました。次いで今日の箇所に取り上げられているのは第 7 番目の戒め、「姦淫してはならない」という戒めです。

前回と同じようにイエス様は十戒を直接引用する形によってではなく、「これこれこのように言われたのを、あなたがたは聞いています」という言い方をされました。すなわち当時の人々がそのように教えられていたということです。私たちは 27 節を見て、「間違いはここにはない。これのどこが問題だろうか」と思うかもしれません。しかしイエス様は当時の教えと対比する形で正しい解説を 28 節以降で述べて行かれます。ですからこの両者を見比べる時に当時の教えの問題が何であったのかが見えて来ます。それは何だったのでしょう。イエス様の言葉から分かることは、当時の人々は、この戒めを外的な行為にのみ限定して考えていたということです。イエス様が言われたような心の中にも関わる戒めとしては見ていない。公然と行われた肉体的姦淫行為だけを問題にしていた。従って、「そんなことなどしていない私は大丈夫。この罪は犯していない。私は全うな人間だ。」と自分を考えることができた。そしてそうではない他の人々を、どうしようもない破廉恥な人間、不道德極まりない下劣な人間だと見下していた。しかしイエス様は、そうでない！と言っているのです。

28 節でイエス様は言われました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」 まず簡単に 3 つのことを心に留めたいと思います。一つ目はここで「女を見る者は」と言われていますが、これは男性にだけ言われているのではないということです。男が人間の代表として扱われているために、この言い方がされているだけであって、女性がここを読む場合は「女を見る」とあるところを「男を見る」と置き換えて考えなければなりません。2

つ目はただ「見る」ことが問題なのではなく、「情欲を抱いて見る」ことが問題であるということです。もし女性を「見た」だけでアウトだとしたら大変です。一切目を開けられなくなってしまいます。そうではなく、禁じられているのは不道德な心で見ることです。そして3つ目は「見る」という言葉は現在形で書かれていて、見続けるというニュアンスを持っていることです。一旦ある姿が目に入ったことが問題なのではなく、継続的に見る、繰り返して見るということが問題にされているのです。

姦淫の話として聖書を知っている人がまず思い起こすのは、ダビデとバテ・シェバの話ではないでしょうか。私は神学校に入学した頃、チャペルで話されたある先生のメッセージが忘れられません。ご存知の通り、ダビデはある時、夕暮れ時に床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていて、一人の女が体を洗っている姿が見えました。その姿が目飛び込んで来たことについては彼を責めることはできません。見ようと思って見たわけではないのですから。しかし説教した先生は言われました。ダビデの罪はその次のことであった。すなわち彼が2度見たということであったと。1回目にそれが目に入るとは防ぐことはできなかったが、彼はそこで自分の目について適切な対処をしなかった。むしろ彼はもう一度見つめた。すなわち2回見たのであると。いや2回どころか、3回、4回と繰り返し、意図的に見つめ続けた。その時に、このイエス様の言葉によれば、ダビデは心の中ですでに姦淫の罪を犯したのです。

ある人は問うかもしれません。ダビデは心における姦淫の結果、実際の姦淫へと進んで行った。そういう意味で心の中の姦淫は外的な行為に発展しやすい極めて危険なことである。しかし実際の行動へと至らなければ問題は無いのではないかと。時にそのように言われることがあります。良くない心を持ったとしても、それで誰かに迷惑をかけるのでなければ、社会に悪影響を及ぼすのでなければ、あるいは自分自身に害をもたらすのでなければ、問題は無いのではないかと。しかし聖書から私たちが学ぶことは、罪とは第一に神に対するものであるということです。ダビデの姦淫の記事からもそのことは分かります。サムエル記第二 12 章で、神は預言者ナタンを使わしてダビデの罪を責めますが、その時、何と言われたのでしょうか。12 章 9 節にこうあります。「どうしてあなたは主のことばをさげすみ、わたしの目の前に悪を行ったのか。」 神はダビデの罪を次のようには指摘されませんでした。「ダビデ！バテ・シェバに対して悪いと思わないのか。」あるいは「彼女の夫ウリヤに対してあなたは何ということをしたのか」と。神は 10 節でも「あなたはわたしをさげすんだ」と指摘しています。ダビデも 13 節で「私

は主に対して罪を犯した」と告白しています。このように私たちのあらゆる生き方は、まず神に対するものであると聖書は述べています。神は私たち一人一人を造ってくださった方です。私たちに体を与え、良き賜物としての性を与え、また動物とは比較にならない想像力という賜物もくださいました。これらを神の目的と御心に反して用いることは、それ自体で神の御前における神への罪なのです。実際的肉体的姦淫に至っていないから私は罪を犯してはいないとは言えない。「人はうわべを見るが、主は心を見る」と聖書にあります。確かに、その心の思いが発端となって、それが思わぬ形で外側に現れて来ます。その結果、しばしば夫婦関係が破壊され、家族関係が破壊され、様々な人間関係に支障が出て来て、社会生活にも困難が生じて来ます。しかしそこに現れたら初めて神は罪ありとされるのではない。その思いが心にある時点で、神は「すでにあなたは罪を犯した」と言われるのです。

果たしてこの神の御前でどうでしょうか。私たちの誰がこの罪を自分は犯したことがないと言えるでしょうか。私たちはどうすれば良いのでしょうか。私たちの望みは、この山上の説教の最初の5章3節に「心の貧しい者は幸いです」とあったことです。また次の4節に「悲しむ者は幸いです」と語られたことです。自分のあわれな状態を正直に神の前で認めてくず折れる時、神はその者をあわれみ、慰めてくださる。あの姦淫を犯したダビデも詩篇51篇で祈りました。「神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。」 私たちも神の前で、自分のありのままの姿を今朝、認めて、神に対して罪の告白をし、聖めを祈り求めたいと思います。神は真実に悔いる私たちの心をさげすまれません。御子キリストの十字架の血の犠牲を通して、その罪を赦し、聖め、新しい心を与えてくださいます。

さてそうして私たちは新しい歩みへ向かわなければなりません。イエス様は29節30節でこう言われました。「もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。」昔のある人々はこれを字義通りに理解して、自分の目を本当に抉り出したり、からだを傷つけることをしたようです。そのため、ある教会会議ではこうしたことを禁じなければならなかったほどだったそうです。確かにこれを文字通り実行しても解決はしないと思います。両目、両足、両手を切り取っても、なお心で姦淫することは可能だからです。

イエス様が言っていることは、これほどの厳しさをもって自分自身と戦わなければならないということだと思います。具体的にはどうしたら良いでしょうか。それはたとえば、心の中の姦淫へと誘惑しそうなものが目に入って来たら、自分は今、目を抉り取った者だと考えて、それを見ない。目をつぶる。同じく手や足が罪の原因となるなら、それを今、切り落としてなくなった者であると自分を考えて、手を伸ばさない、また誘惑となる場所に足を向けない。誰かが見ているわけではありませんから、これは神と私の間になすべき取り組みです。

そしてここにはこのように取り組むための大きなチャレンジと励ましがあると思います。イエス様は「もし右の目が」とか「右の手が」と言われました。「右」とは、ここではより勝っている方のことを言っています。尊い価値を持つものです。それを捨てなさいとはどういう意味でしょうか。それは、それにはるかに勝る祝福が、そうする者には約束されているということです。つまりイエス様がここで言っていることは、永遠のいのちに入るためならどんな犠牲も惜しむべきではないということです。たとえ右の目を失ったとしてもです。もちろんその右目があなたをつまづかせないなら、それを保っていても良い。しかしもしその右目があなたをつまづかせるなら、すなわち欄外に別訳があるように、あなたに罪を犯させるなら、そうして神との関係を曇らせ、神が喜ばない暗い道を進ませるなら、どうすべきか。私たちの前には二つの道があります。一つは右の目をそのまま保ち、罪を犯す生活を続け、最後にその報いとして体全体ゲヘナに投げ込まれる道に行くこと。すなわち永遠のさばきに落ちることです。もう一つの道は、右の目をえぐり出すような戦いをしてでも、罪を犯さず、罪から離れる道を選ぶことです。今ここで右目をえぐり出すという取り組みをすること、それだけを見つめれば、それはつらく、苦しく、悲しいことであるかもしれません。しかしイエス様が言っていることは、永遠のいのちはそのようにしてでも獲得するに値するものであるということです。言い換えればこの取り組みをする時、私たちは失うものにはるかに勝る素晴らしい祝福に向かっていよいよ前進するのです。今ここで自分を満足させ、最後は滅びに至るといふこの世のために生きるのか、それとも右目をえぐり出すような戦いをして、それにはるかに勝る来たるべき御国の祝福のために生きるのか。私たちは決断しなければなりません。自分をつまづかせるもの、誘惑となるものを捨て、罪を犯さず、聖い良心を持って神に従って行く。そのような人に永遠のいのち、また天の御国の祝福はいよいよ開かれて行くのです。

最後の 31～32 節に記されている「離婚」に関する教えも、「姦淫してはならない」という戒めとの関連で述べられていると思われます。このイエス様の言葉の意味を十分に知るには、19 章 3～12 節のイエス様の言葉も合わせて考える必要があると思いますが、やがてそこを見ることとなりますし、時間の関係もありますので、今日は詳しく見ることはしません。ポイントだけ申し上げれば、当時の人々は旧約聖書にある「だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ」という言葉に基づいて、離婚は簡単にできると考えていました。もともとこの言葉を語ったモーセは、当時の混乱状態を前にして、「離婚状を与えなければ離婚できない」と、性急な離婚に歯止めをかけようとしたのですが、イエス様の時代の人々は、離婚状さえ発行すれば離婚ができ、他の人と結婚できる。そしてそれは姦淫ではないと考えていました。しかしイエス様は、それは姦淫だ！と言っているのです。唯一正当な離婚の理由は相手方の不貞のみであるとイエス様は言っています。夫婦の一体性を破壊する不貞の罪、姦淫の罪を相手が犯した場合のみ、こちらは罪を犯すことなく離婚することが認められる。しかしこれ「以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです」と 32 節にあります。この根底にある真理は、前の結婚関係は神の前に継続しているということです。だからその状態で離別された女が他の人と結婚したら、それは彼女に姦淫を犯させることであると。これは彼女が悪いという意味ではなく、その責任は先の夫にあるということです。夫が彼女に姦淫を犯させるのです。そして離別した女と結婚する男も姦淫を犯すこととなります。また妻を離別した男についても、他の女と結婚すれば、姦淫を犯すこととなります。19 章 9 節：「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」つまり結婚は本来、永続的なものであるということです。イエス様は 19 章 4～6 節でこう言われます。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」このように結婚は一生涯のものであるべきである。性的な関係はこの関係においてのみ正しく用いられるべきものである。その本来の姿に立ち戻って歩むことをイエス様は教えておられるのです。

私たちはこの御言葉の前にどうでしょうか。自分の様々なやみをあぶり出される御言葉だと思えます。ある人にとっては、これ以上聞きたくない言葉かもしれません。耳をふさぎ、考えたくない言葉かもしれません。色々な弁解が心に浮かぶかもしれません。

しかし誤解を恐れずに言えば、神の前に悔い改めて赦されない罪はありません。姦淫の現場で捕らえられた女さえも赦されました。ですから私たちに必要なことは、私たちの心を見ている神の前で一人一人が自らを点検することではないでしょうか。神にさぐっていただき、そのままの自分を神に正直に告白して、罪の赦しと聖めを求めることではないでしょうか。ダビデのように「ヒソブをもって私の罪をのぞいてきよめてください」と祈ることではないでしょうか。そうする者を神は御子キリストの尊い十字架の犠牲によって赦し、聖めてくださいます。しかしそれで安易にそこにとどまってはなりません。姦淫の現場で捕らえられた女に、イエス様は「あなたを罪に定めない」と言われただけでなく、「今からは決して罪を犯してはなりません」とも言われました。赦されたからと言って、その罪にとどまる人は、本当に赦しを受け取ったとは言えません。赦しを受け取った人は、主の恵みに感謝して新しい歩みへ向かいます。私たちも赦しを簡単に考えて、誘惑となるものを取り除かず、罪を犯し続ける生活を許容し、自分をだまして、結局滅びの道を行くことがありませんように。ただ単に姦淫しないということにばかり心を向けるのではなく、むしろ姦淫の思いを退けることによって神の前にきよい心を保ち、5章8節に「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」とあったように、神をいよいよ見、またこの方と交わる祝福に生きることができるようになります。つまりきよくなるものを生活から取り除き、罪を犯すことから自分を守り、それを乗り越えて行くことと引き換えに、いよいよ目の前に開かれて行く永遠のいのちへの道を喜びを持って進んで行くことができますように。そのように歩むことが、パリサイ人の義にまさる義の生活であり、また神が喜びたもうものです。そしてこのきよい心から外側に現れ出るきよい生活によってこそ、人々が私たちの行いを見て天の父の御名をあがめるようになるということが導かれて行くのだと思います。